資料

第２子以降の出産を迎える家族のニーズ

The Family Needs at the Second Birth

小嶋理恵子・兵頭　慶子・水畑喜代子・永瀬つや子
Rieko Kojima・Keiko Hyodo・Kiyoko Mizuhata・Tsuyako Nagase

要　旨

第２子以降の出産を迎える家族が，年長子との関係形成をしていくプロセスを明らかにし，必要とされるケアを考察することを目的に，２人以上の子育てをしている２名の研究参加者から，半構成的インタビューによりデータを収集し，グラウンデッド・セオリーアプローチの手法を参考に質的帰納的分析を行った。

その結果，【家族内支援の立て直し】,【上の子との関係維持に向けた試行錯誤】,【家族内支援の活用】,【近隣者ネットワークの活用】,【上の子の変化についての情報収集】,【兄弟（姉妹）関係の芽生え】という６つのカテゴリーが抽出され，比較検討した結果，【上の子との関係維持に向けた試行錯誤】をコアカテゴリーとした。この結果から，第２子以降の出産を迎える家族に対して，妊娠期から，父親や祖父母も含めた年長子の発達や情緒面の変化，退行現象に対する対応方法の提供と，年長子の兄・姉になる心理的準備に対する支援について示唆を得ることができた。

キーワード：第２子以降の親業，兄弟関係，心理的準備
parenthood at the second-time, sibling, preparing kids

Ⅰ．はじめに

第２子以降の出産を迎える家族の発達課題は，「年長の子どものニードを満たしながら，新しい家族員（生まれてくる子）を統合していく方法を見出すことであり，上の子の乳児に対する嫉妬や，大人への注意獲得行動として表出される行動や感情に，両親が敏感に対応できれば，新しい子どもの誕生に対する年長の子どもの心の準備や，状況改善に役立つ」といわれている（野嶋，1996)。しかし，先行研究では，妊娠中期から後期にかけて，第１子の「聞き分けのない振る舞いをする」「精神的に不安定になる」という行動が増え，親の対処行動として叱る関わりが増えていること(小島ら，2003)，母親は，子育て中における第１子との関係の中での苛立ちや，ジレンマを感じており，どこまで怒ったら良いのか悩み，「母子関係を再形成する過程での不全感」を抱いていること（田尻，2003）が指摘されており，年長子の対応に戸惑う親の姿が明らかになっている。

また，妊婦自身が，妊娠中から，年長子の育児について相談に乗ってもらいたい，具体的な対応の仕方を教えてもらいたいという希望を持っていること（Sawicki，1997；蓼沼，2005；園田，2007）から考えると，子どもと接する機会が少ない中で親になった世代にとって，未知の体験ともいえる年長の子どものニーズを満たしていくことは容易ではないといえる。

以上のようなことから，母性看護の領域におい

宮崎大学医学部看護学科　小児・母性 (助産専攻) 看護学講座
School of Nursing, Faculty of Medicine, University of Miyazaki

て，妊娠期から年長子との関係形成に向けた支援に取り組むことは重要である。

そこで本研究では，第２子以上の子育てをしている女性の体験から，年長子との関係形成についての取り組みを明らかにすること，そして，第２子以降の出産を迎える家族が，上の子との関係を形成していくうえで必要な助産師の支援について考察することを目的とした。

Ⅱ．研究方法

１．調査期間および研究対象者の選択

１）調査期間：2007年12月～2008年１月

２）研究参加者の選定：調査期間において，子育て支援グループの代表に，本研究の目的と，得られたデータは研究以外の目的では使用しないこと，プライバシー には十分に配慮することを説明し，研究参加者の紹介を依頼した.

２．データの収集方法

データの収集は，対象者が指定した自宅等の場所で，一人に対して１時間前後の半構成面接を１回行い，内容を研究対象者の同意を得て録音した。半構成面接における質問は，下の子を妊娠・出産した時の上の子の反応，上の子に対する対応方法と気持ち，欲しかった援助である。

３．分析方法

１）面接を録音したテープから逐語録を作成し分析データとした。

２）グラウンデッド・セオリーアプローチの手法を参考に，研究参加者の語りの文脈に留意しながら，データのコード化，サブカテゴリー化，カテゴリー化を行った。その後，カテゴリー間の関連性についても検討し，中心となるカテゴリーを抽出した。

４．信頼性と妥当性の確保

分析過程において，サブカテゴリーやカテゴリーについて，母性看護学の研究者４名で討議を重ね，信頼性と妥当性を高めた。

５．倫理的配慮

研究参加者の権利を保護するために，研究協力を辞退する権利，答えたくない質問には答える必要がないこと，研究協力は途中でも辞退することが可能なこと，得られたデータは研究以外には用いないこと，結果については，匿名性の保持をしたうえで公表することについて文書にて説明し同意書を得た。また，得られたデータはフェイスシートとインタビューデータにわけ，鍵付きキャビネットに保管した。

Ⅲ．結　果

１．研究参加者の概要

Aさん：30代前半，妊娠４か月，３歳男児，１歳５か月男児，夫と暮らしている。

Bさん：30代前半，６歳男児，４歳女児，１歳男児，夫と暮らしている。

２．第２子以降の出産を迎える家族が上の子との関係を形成していくプロセス

第２子以降の子育てをしている母親の語りを分析した結果，【家族内支援の立て直し】，【上の子との関係維持に向けた試行錯誤】，【家族内支援の活用】，【近隣ネットワークの活用】，【上の子の変化についての情報収集】，【兄弟 (姉妹) 関係の芽生え】という６つのカテゴリーが抽出され，比較検討した結果，【上の子との関係維持に向けた試行錯誤】をコアカテゴリーとした。

以下に，各カテゴリーと，それを構成するサブカテゴリー，カテゴリーを代表するデータを用いて説明する。カテゴリーは【　　】，サブカテゴリーは，＜　　＞で示した。説明のために内容を表しているデータの一部を「　　」で示した。

１）【家族内支援の立て直し】

このカテゴリーは，＜夫を親にするための方法の模索＞，＜支援の中心者である実母＞の２つのサブカテゴリーから構成された。研究参加者は，第１子の子育て時の経験から，複数の子どもを育てていくためには，父親の育児協力が必要であると認識していた。そのため，父子だけの時間をつくり，夫を褒め育児への参加を促進する働きかけ

を行っていた。一方で，実母や周囲から，一般男性の育児参加の現状を聞き，自分の夫だけではないという認識も持っていた。第２子以上の出産を迎える女性にとって，実母の役割は，夫を親にする方法を教えてもらうだけでなく，実際の子育て支援の担い手としても重要な役割を持っていた。

「女性が気をつけて子どもたちとコミュニケーションをとらせるようにしないと・・。「ちょっと子ども見といて，とかお風呂に入れて」とか，それをさせるかさせないかで違うんですよね。やっぱり。」

「(実母にもらった助言で役に立ったこと）旦那に対して，とにかくありがとうと言えと。それから男にはあんまり期待するなということですね。」

２)【上の子との関係維持に向けた試行錯誤】

このカテゴリーは，＜上の子のニーズに対応できないというジレンマ＞，＜おりこうさんじゃなくなる＞，＜上の子の育児への行き詰まり＞，＜子どもとの取引＞，＜上の子と向き合う時間をつくる＞，＜上の子を優先する＞の６つのサブカテゴリーから構成された。妊娠継続のニーズを持つ，あるいは生まれてきた子どものケアもしていかなければならない母親にとって，年長子との関係維持は大きな課題であった。そして，年長子の退行現象を＜おりこうさんじゃなくなる＞変化として母親は認識しており，行き詰まりやジレンマを感じていた。しかし，年長子のニーズを優先したり，代替案を出して対応する＜子どもとの取引＞などの方法を試しながら，関係維持を図っていた。また，年長子とだけと向き合う時間は，子ども自身の不満を解消する方法として有効だと実感していた。

一人の女性は，年長子と物理的に離れることが，関係維持を妨げる要因になることを体験として語っていた。

「絶対立ったまま抱っこということもありますので，その時は，じゃあプラス10秒抱っこという感じでやはり取引がありますね。」

「一緒に生活してしばらくは，本当にお利口さんだったんですけど，ママはずっといてくれるんだってわかった瞬間，コップはひっくり返す，落書きしまくりで・・・」

「(退院後)，100日前後が一番きつかったかな。その間に２番目が体調崩して入院しちゃったんですよ。それで10日離れたんですよ。また長男との関係が反抗期の振り出しに戻って。」

「(３人目の出産で入院していた時は）うちの親が，幼稚園のお迎えにいくときに病院に寄ってくれて，毎日子どもたちとお茶して，「今日はこんなことがあったよ，あんなことしたよ」って話して，それでしばらくしたら，じゃーね。バイ　バイって感じで。私のほうも，毎日顔が見れるから，私としても安心できましたしね。」

「１週間に一度の息抜きタイムみたいにして，ばあちゃんに２人目を預けて，２人だけで散歩して買い物して帰ってくるみたいにして，ちょっとガス抜きみたいにしていたんです。」

３)【家族内支援の活用】

このカテゴリーは，＜夫の育児支援の活用＞，＜実母の育児支援の活用＞の２つのサブカテゴリーから構成された。家族内支援の立て直しにより，夫の育児分担が可能になった場合には，日常の女性の負担感は軽減されていた。また，実母は，里帰りという形態での育児分担から，年長子や母親の状態が落ち着くまで通うなど，様々なバリエーションでの育児分担を行っていた。

「後は，パパが早く帰ってきてくれて手伝ってくれて。毎日５時ジャストには家に戻ってきてくれて，そこから長男を連れだしてくれて，二人ででかけてくれるので，その間下の子にミルクをやったり，食事の支度をしたり」

「週に1回，母も通ってきてくれて，面倒みてくれて・・ (中略)。」

４)【近隣ネットワークの活用】

このカテゴリーは，＜近隣者の好意＞，＜限られた時間での活用＞の２つのサブカテゴリーから構成された。家族内支援が活用できない場合，近隣者による支援を受けられることは，複数の子どもを育てる上で女性の負担感を軽減していた。しかし，この支援は近隣者の好意によって成り立っていること，夕方，受診時という限られた時間で

の活用が特徴であった。

「２番目は小さくて，風邪をよく引いていたけど，病院も遠方まででなければならないので，２人連れて行くのはとても大変で。隣の方が心よく預かってくれて。」

「夕方にぐずるじゃないですか。泣いていると『おー泣いているね。おじちゃんと遊ぼう』とか，ばあちゃんと遊ぼうとか。これが一番，すごい助かった。ありがたかったですね。」

５）【上の子の変化についての情報収集】

このカテゴリーは，＜父親を通じた情報収集＞，＜実母からの情報収集＞，＜子育てグループ・友人からの情報収集＞，＜インターネットからの情報収集＞，＜情報収集の困難さ＞の５つのサブカテゴリーから構成された。年長子の変化の意味や，その対応を知るために，下の子どもが生まれた場合，どのような反応をするのかについて情報を知りたいと考えていた。そのため，父親や，実母，子育てグループ，インターネットから情報収集を行っていた。得られた情報は，年長子との関係維持に向けた対応に活用されていた。一方で，年長子の変化を予期するための情報の得にくさや，施設の出産準備教室では得られる情報がないと認識していた。

「パパが見かねて，なんかね，怒るより抱っこした方がいいらしいよって。なんか８秒間抱っこということを書いてある本を読んだらしくって。あーだまされたと思ってやってみたって感じで」

「(上の子の育児のことについての情報は）インターネットをよく見ていたので，掲示板とかに相談したり，１人目が生まれて，インターネットの掲示板で仲良くなった方とか。」

「(出産準備教室では)，欲しい情報はなかったですね。ものめずらしさで，どんなことをするのかなって感じでいったんで。欲しい情報は，やっぱりお兄ちゃんとの関係，上の子を預けるところがどこかにあるかとか，公共施設で使える場所だとか・・。」

６）【兄弟（姉妹）関係の芽生え】

このカテゴリーは，＜下の子の反応の出現＞，＜兄弟（姉妹）遊びの成立＞，＜世話することの楽しさ＞，＜兄（姉）としての自覚の芽生え＞の４つのサブカテゴリーから構成された。母親，父親といった大人との関係が中心であった年長子にとって，下の子の反応が出てくることは，関心の対象となり，遊びの中で関係形成がされていった。また年長子が女児の場合，母親の模倣で世話をすることの楽しさを感じており，兄・姉としての自覚が芽生えていた。上の子と下の子の関係が出来て，年長子の退行現象が落ち着いてきたことにより，母親が年長子の対応に困ると感じることは減ってきていた。

「寝返り，ハイハイの時期になったら，上の子は落ち着きましたね。下の子の反応がでてきて，『面白いなあ』って一緒に遊んでくれるようになったり，ちゃんとしたもんで，２人でなんだか笑いあっていて。」

「(第３子が生まれた時に）お兄ちゃんが，下の子（妹）に，「かわいいね。○○ちゃん，ほら弟だよ.」みたいに諭していて。「へー」って。だから，そんなに困ったことは無かったといえば無かったですね。」

３．上の子との関係を形成していくプロセスにおけるカテゴリー間の関連性

上記のプロセスにおける６つのカテゴリー間の関連性について述べる。第２子，３子を育てていくために，女性は，【家族内支援の立て直し】を行い，実際に【家族内支援の活用】ができるように準備していた。また，家族にとっては，年長子の退行現象や，甘え，嫉妬それ自体が未知の経験であるため，【上の子の変化についての情報収集】を行いながら，【上の子との関係維持に向けた試行錯誤】を妊娠中から継続して行っていた。そして，【近隣ネットワークの活用】は限られた時間であったとしても核家族にとっては有効な手助けの一つであった。また，【上の子との関係維持に向けた試行錯誤】に費やされていた家族の労力，特に母親の年長子の反応に対する困難感は，【兄弟（姉妹）関係の芽生え】により軽減したと自覚されていた (図１)。

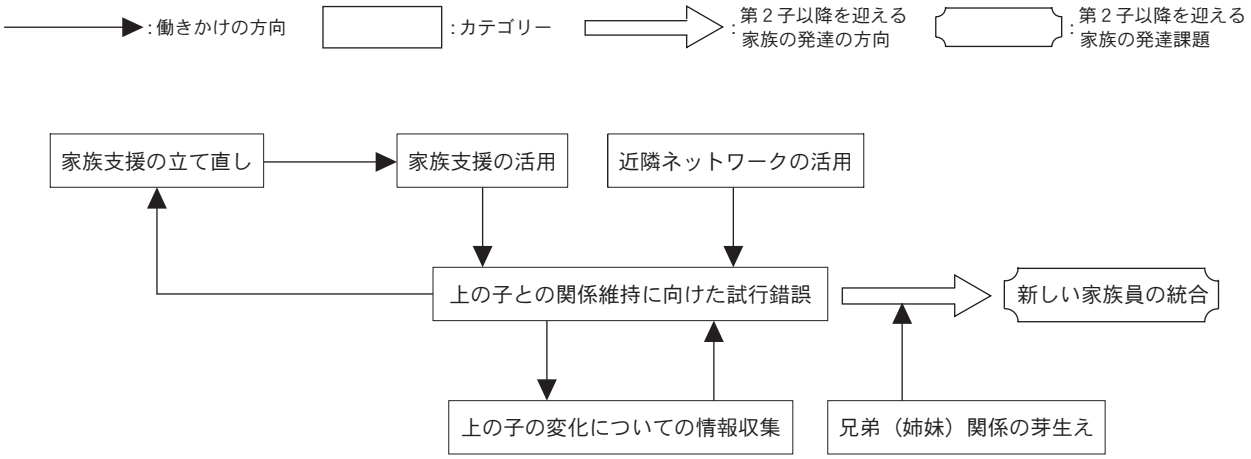

図１　上の子との関係を形成していくプロセスにおけるカテゴリー間の関連性

Ⅳ．考　察

第２子以上の子育てをしている女性の体験から，年長子との関係形成についての取り組みについて分析を行ったところ，田尻（2003）の研究によって明らかになった，年長子の対応に困惑し，「母子関係を再形成する過程での不全感」を抱いている母親の姿ではなく，年長子と生まれてくる子どもの両方の子育てができるように，妊娠中から積極的に【家族内支援の立て直し】を行い，【家族内支援を活用】，【近隣ネットワークの活用】を行っている姿であった。これらの行為により，新しい家族員の統合がなされていた（図１参照）。

O'Reilly (2004) は，女性が第２子を家族に統合していくプロセスを「新しいバランスを獲得すること」としており，そのための基本要素として，「家族外の支援を探すこと」，「家族員の間で子どもを養育する関係を形成していくこと」をあげているが，今回得られたカテゴリーの【近隣ネットワークの活用】，【家族内支援の立て直し】，【家族内支援の活用】と類似するカテゴリーであると考える。また，【上の子の変化についての情報収集】については，【上の子との関係維持に向けた試行錯誤】に向けて具体的な対応を教えてもらいたいという経産婦のニーズの現れでもある（Sawicki，1997 : 蓼沼，2005；園田，2007）。

以上のことから考えると，今回の研究は，２名のデータの分析ではあるが，第２子以降の子育てをしている女性に共通する体験であるといえる。

次に，第２子以降の出産を迎える家族に対する支援について，母性看護の役割である以下の３点について考察を行う。

１．家族内支援の立て直しに向けた支援

本研究の結果から，第２子以上の出産を迎える家族にとって，家族内支援の立て直しが重要になることがみえてきた。母親の育児負担や，育児不安には父親の育児サポート状況が大きく影響するが（本保ら，2003），夫の育児サポート率は，初産婦48.4%，経産婦32.5%と経産婦へのサポートが低いのが現状である（小島，2003）。特に経産婦では夫の年長子の世話に対するサポートへの不満が高く，それによって夫との親密度が低下することも明らかになっている（小島，2003）。

また，大月ら（2002）は，第１子の第２子に対する適応がスムーズにいった要因には，妊娠中から出産後も継続して，夫婦間の役割調整が行われること，実父母のサポートが得られることを明らかにしているが，今回の研究参加者の体験では，この２つの要因が働いていたことで，年長子との関係維持が図られたのではないかと考える。しかし，夫婦間の役割調整についていえば，今回のケースでは，妻からの働きかけにより夫の変容が認められたが，男性の育児サポート率の低さを考えると，妻からの働きかけだけでなく，年長子の変化や育児における父親の役割について学べるような，出産準備教育の提供を考えていくことも重要である。

また，対象の家族が，実父母を含め，誰からの支援を受けるのかを確認し，その支援者も含め，上記のような提供をしていくことが有用であると考える。

２．上の子との関係維持に向けた支援

経産婦は，出産準備教室では，生まれてくる子供を家族に統合していくための具体的方法を学びたいというニーズを持っているといわれているが(Nolan，2002)，今回の研究協力者も同じようなニーズを持っており，また甘えや嫉妬などの年長子に起こっている変化は，「おりこうさんじゃなくなる」というようなネガティブなイメージでとらえられていた。「おりこうさんじゃなくなる」という認識であれば，親の対処行動としては，「叱る」という関わりが増えてくる。新しい子どもが生まれてくることによって起こる年長子の退行現象を親がどう対応したらよいかについて，Sawicki (1997) は，退行現象を，年長子が赤ちゃんの気持ちを理解するための行動として，親の認識を変える方法を提唱している。「叱る」のではなく，その退行現象を通して，「赤ちゃんについて」話す機会の場としていくことも生まれてくる子供を家族に統合していくための具体的な方法となるのではないだろうか。また，１歳から４歳までの子どもは，母親との分離状況におかれた時に不安状態を示す傾向にあるといわれている(Schaffer，1998/無藤ら，2001)。研究参加者も，産後の入院中に，年長子と触れ合う時間をつくることで母子ともに安定していたこと，退院後に再度入院のために年長子と離れたことで関係が振り出しに戻ったと認識していることからも，可能であれば，年長子との関係が途切れないように面会時間を使うことは有効ではないだろうか。

３．上の子の兄・姉になる心理的準備

今回のケースでは，下の子の反応が出てくること，遊びが成立してくること，また女児であれば，母親の真似をして赤ちゃんの世話をすることによって兄・姉へと変化していく様子が明らかになった。しかし，親が親になる心理的準備を必要とするように，年長子が兄・姉になる心理的準備も必要である。そのことについても，看護として取り組み始められている (Storr et al., 1998；堀内ら, 2004)。具体的には，下の子どもが生まれてきたとしても，年長子に対する愛情は変わらないということを子どもの発達段階に応じて伝えていくこと，また，妊娠中から，赤ちゃんが生まれた後に，年長子がしたいこと，してほしいことを家族に伝えられる場を設けること，下の子が生まれるということについて年長子と一緒に考えていくことなどを通して，年長子の兄・姉になる心理的準備をしていくことが，新しく生まれてきた子どもが，その家族に統合されていくうえで有用であると言われている。

家族をひとつのシステムとして捉えたとき，肯定的な変化をもたらすためには，配偶者サブシステム，親－子サブシステム，同胞システムのいくつかに働きかけることが必要だといわれており(野嶋，1996)，新しい家族の統合に向けての援助としては，年長子の行動や感情を，親が理解し対応していくための援助と，年長子どもの新しい弟妹の誕生に対する心理的準備に向けての援助という双方向性の支援が有用だと考える。

Ⅴ．おわりに

本研究の結果から，第２子以降の出産を迎える家族が，上の子との関係を形成していくうえで必要な支援として，家族内支援の立て直しに向けた支援，上の子との関係維持に向けた支援，上の子の兄・姉になる心理的準備のための支援についての示唆をえることができた。今後は，経産婦対象とした家族教室などの場において，複数の家族サブシステムに働きかけるようなプログラムについて検討していきたい。

本研究では，今回の分析対象者が２名であるということから，先行研究と同様のカテゴリーが見られるとはいえ，カテゴリーの飽和化に至ったとはいえない点，子育てグループの参加者であるという対象特性という点において限界がある。

今後は対象者の背景を広げ，信頼性・妥当性を高めていくことが研究の課題である。

引用・参考文献

１）Friedman M. M/野嶋佐由美監訳（1996）: 家族看護学－理論とアセスメント－，89-92，へるす出版

２）堀内成子，土屋麻由美，片岡弥恵子（2005）: 赤ちゃんがやってくる，ペリネイタルケア2005年夏増刊号，211-218.

３）本保恭子・八重樫牧子（2003）: 母親の子育て不安と父親の家事・子育て参加との関連性に関する研究，川崎医療福祉学会誌，13(1)，1-13

４）河田みどり，杉下知子，佐藤千史（2004）: 分娩施設の助産師のよる新生児訪問のニーズ，母性衛生 45(1)，20-27

５）小島康生・入澤みち子・脇田満里子（2003）: 第二子妊娠期間中における母親－第一子関係，母性衛生 44(2)，244-249

６）Nolan M（2002）: Special Parents, Education and Support for Parenting : A Guide for Health Professionals Education and Support, ELSEVIER，England

７）大月恵理子・森　恵美（2002）: 第２子出生前後の第１子の反応と家族の認知，母性衛生 43(2)，332-339

８）大月恵理子・森　恵美（2002）: 第２子出生に伴う家族の適応過程，日本母性看護学会誌 2(2)，31-40

９）O'Reilly M. M（2004）: Achieving a New Balance : Women's Transition to Second-Time Parenthood, Journal of Obstetric, Gynecologic, & Neonatal Nursing. 33(4)，455-462

10）Sawicki J. A（1997）: Sibling Rivalry and the New Baby:Anticipatory Guidance and Management Strategies, PEDIATRIC NURSING. 23(3)，298-302

11）Schaffer H. R (1998)/無藤 隆・佐藤恵理子（2001）: 子どもの養育に心理学がいえること－発達と家族環境 22-23，新曜社

12）園田かおり（2007）: ある経産婦の出産体験からニーズを探る，神奈川県立保健福祉大学実践看護教育センター看護教育研究集録 32，220-225

13）Storr G. B., Robinson P (1998) : Preparing Kids for The New Baby, The Canadian Nurse, 33-35

14）田尻后子（2003）: 第２子を出産した産後１ヶ月の母親の体験　第１子との体験，日本母性看護学会誌，3(1)，27-35

15）蓼沼由紀子，今関節子（2005）: 切迫早産により入院中の妊婦の予期的不安，母性衛生，46(2)，267-274